

ボランティア・市民活動を広げ、応援する！▶

ネットワーク

特集

市民活動の発信を考える

東京ボランティア・市民活動センター



みんなでくつろげる雰囲気での話し合い

特別レポート! たのしい きもちになれる ちいきの居場所

長い間、街の呉服屋さんとして親しまれた「たきち」。店主の逝去に伴い、惜しまれながらも閉店しましたが、店主のご子息である室田信一さんが、練馬区社会福祉協議会と連携し、2025年4月に家でも学校・会社でもない第3の居場所として生まれ変わりました。

今回、ボランティアで運営に携わっている森笠音さんに高校生ならではの目線で「たきち」について語っていただきました。

私

は今、下石神井の「たきち」というみんなの居場所での運営に携わっています。たきちとは2023年まで呉服屋として下石神井を支えてきたお店が生まれ変わり、地域のいろいろな人が自由に集まるみんなの居場所となった家です。中に入るといろいろな人がまるで家のようにテーブルを囲んでくつろいでいます。きつと呉服屋のたきちもそんな風にみんなが落ち着ける空間だったのでしょうか。

私が初めてたきちを訪れたのは中学校の卒業式の帰りでした。父に「知り合いがたきちという場所を立ち上げたから寄ってみよう」と言われ、行くことになりました。はじめは「お客さんとして少しのぞくくらいにしよう」と思っていました。

その日はちょうどプレオープンの日で、入り口に来てみると大の大人がまるで文化祭のように呼び込みをしていました。少しお堅い場所なのかと身構えていたので、少し驚き同時になんか面白そうだなと感じました。

中

に入ってみると明るく穏やかな雰囲気です。とても居心地がいい空間でした。私は、いつもなれない空間に行くところではない感じがしてそわそわしてしまうのですが、なぜかたきちは初めて来た場所なのに、まるで家のように安心する空間でした。なので少しのぞくだけのつもりだったのがいつの間にか終わりの時間までたきちにいました。そのままたきちから帰りたくなって片づけに参加し、ちゃっかり終わりの話し合いにも参加していました。

数

話し合いでは今後の運営など私には少しわからないことを話し合っていました。たきちの大人の人たちが、私のことを気にかけてくれて、私にも話を振ってくれたので楽しかったです。何より驚いたのがたきちの人たちが私の話を聞くととき私の方に体を向けて、子どもの話ではなく、一人の人の話として耳を傾けてくれたことです。「子どもだし初参加だから引っこんでいよう」と思っていたのに「みんなの居場所にするため中高生の意見を聞きたい」と話を振ってくれるので、楽しくなって気づいたらどんどん自分の意見を言っていました。普段知らない人の前ではあまり自分を出せない性格なのですが、たきちでは自分らしくいることができました。帰るころには「また来たいな」「私も何か役に立ちたいな」と思うようになっていました。

日後、たきちのチラシができ、それを入れるチラシボックスを作った家の前につるしていたら、それを見たたきちの人が「たきちにも作ってほしいな」と言ってくれたり、もう一



みんなの家 たきち

東京都練馬区下石神井にある、家でも学校・会社でもない「第3の居場所」を目指し、2024年からオープンに向け地域の方々と実行委員を結成。居場所開催日はホームページ(QRコードから)に掲載。

住所 〒177-0042
東京都練馬区
下石神井2-36-24



まるで文化祭みたいだったプレオープン



呉服屋時代ののれんが今もみんなを迎えます



たきちで行ったイベントの様子



たきちと自分の家の前に設置したボックス



(森笠音・大妻中野高等学校1年生)

私も経験したのに小学生の子たちと話していると、新鮮な感じがします。するといつもと違う空気が吸えて、明日ちょっと頑張ってみようという気になれるのです。このような他世代との交流は、みんなの居場所において私が一番大切にしたいことです。たきちがいろいろな人と関わってちよっと元気をもらえる場所になればいいなと思っています。

私たちは今高校生ですが、習い事で小学生の子たちともよく話します。小学生は私も経験したのに小学生の子たちと話していると、新鮮な感じがします。するといつもと違う空気が吸えて、明日ちょっと頑張ってみようという気になれるのです。このような他世代との交流は、みんなの居場所において私が一番大切にしたいことです。たきちがいろいろな人と関わってちよっと元気をもらえる場所になればいいなと思っています。

つボックスを作りました。そこから私はたきちの実行委員工作係になりました。

特集

市民活動の発信を考える

- 5 寄稿 SNS からリアルの場へ ～拠点としての本屋～
◇岩下 結 編集者、よりまし堂・本屋担当
- 9 寄稿 「よりまし堂」訪問記
◇小池 良実 岡さんのいえ TOMO・オーナー、本誌編集委員
- 10 どうしていますか？ 情報発信 ～活動団体インタビュー～
◇こども食堂がるまる／岡さんのいえ TOMO／一般社団法人にじず
- 14 あわせて読みたい2冊 ——編集部の書棚から
- 15 寄稿 フェイクニュース時代を生きるために必要なこと
◇山脇 岳志 スマートニュース メディア研究所所長

- 1 特別レポート！ ①たのしい ②きもちになれる ③ちいきの居場所

- 17 『全国若者自立支援プロジェクト』報告書より
～社会的養護が必要な子どもたちの自立支援ネットワークづくり～

- 20 映画と市民 第25回 幻想として表出された心の陰画 『敵』
◇瀧澤 利行 茨城大学教育学部教授

- 21 せかいをみる⑮
西アフリカ・ベナンで生きる 農村で暮らす人たちとともに
◇エケ 陽子 NGO SaluTota 副代表

- 23 東京しまじま物語 青ヶ島の巻
「墓刈り」という青ヶ島のボランティア

- 25 いいもの みい〜つけた！ Vol.55
おいしさがぎゅっとつまった こだわりの手作りジャム
◇つばさ工房
特定非営利活動法人 北区精神障害者を守る家族会 飛鳥会



表紙のことは

列車の窓から見える田んぼは
美しくて心安くて、
ありがたすぎて頭が上らない。
生産してくださる方々に、
大地に大氣に宇宙に感謝して、
ことほぎが結晶してひとつづつ
のお米になるのだろう、きっと。
—フローラル信子

もしもボランティア活動中にケガをしたら… ケガをさせたり、物を壊したら…

※ボランティア保険および行事保険の加入は、東京都内の各区市町村のボランティアセンターまたは東京都社会福祉協議会窓口で手続きができます。



東京都社会福祉協議会指定生損保代理店
有限会社 東京福祉企画

〒162-0825 東京都新宿区神楽坂1-2
研究社英語センタービル 3階

TEL. 03-3268-0910
FAX. 03-3268-8832





市民活動の発信を考える

取材協力：小池良実（岡さんのいえ TOMO / 本誌編集委員）

インターネットが普及しはじめた頃、「誰もが平等に発信できる」という特性から、「これから自由に語り合える社会になる」といった期待の声が少なからずありました。

それから30年余り。誰もが「発信」できる時代になった一方、SNSを開けば、「思い込みによる誤情報」「無責任に拡散される流言飛語」「意図的な虚偽言説」などが蔓延しています。市民活動においてもインターネットの恩恵を受けつつ、とくに昨今は、外国人や女性など「社会的弱者」を支援する団体に対して、誤った情報や誹謗中傷を意図的に拡散させて炎上させる、といったふるまいが目立つようになりました。

こうした時代の空気を踏まえて、今号では市民活動の発信について皆さんと考えたいと思います。

最初に、市民活動と言論・メディアのあり方について、本屋を営む岩下結さんの寄稿をご紹介します。岩下さんは、書籍という“原始的なメディア”が、デマやバッシングに流されず、言論空間の劣化に歯止めをかけられるのではないかと期待します。

そして、市民活動の発信状況について、テーマや規模の異なる3つの団体にインタビューしました。

発信するためには、真偽を見分け、情報と上手に付き合っていくことも必要でしょう。そこで、メディアリテラシー教育の研究・実践に携わってきた山脇岳志さんに寄稿していただき、特集のラストに掲載しました。

インタビューの中で、大切なのは自分たちのコアのメッセージに戻ること、というお話がありました。ポジティブな側面とネガティブな側面をふまえつつ、市民活動として「自分たちの声を世間に届ける」ことの意義について考えるきっかけとなることを願っています。

つい入ってみたいくなるような
よりまし堂のたたずまい。

日々の様子はInstagramの
アカウントでもチェックできる。



寄稿

SNSからリアルの場へ 〜拠点としての本屋〜

岩下結^{ゆう}（編集者、よりまし堂・本屋担当）

「まずは自己紹介から」

まずは読者の皆さんに、私が何者かという自己紹介が必要だろう。自分でも最近、立場を説明するのに少々苦労する。「本の編集者で、20年あまり出版社に勤めたけれど現在はフリー。そして4月から地元で本屋とカフェのお店を始めました」。相手の頭の上に「？」が浮かぶことがしばしばだ。まとめて言えば「本を作る」仕事に最近「本を売る」仕事加わった、ということになるが、開店してまだ2か月（執筆時点）なので胸を張って「本屋です」と言うには心許ない。せいぜい「本屋見習い」くらいだろう。

そんな中途半端な立場ではあるが、市民活動と言論・メディアのあり方について、考えてきたことを書いてみたい。

「街に「拠点」が欲しかった」

店は東京の日野市、京王線の南平^{みなみだいら}という駅の近くにある。各駅停車しか止まらないマイナーな駅で、駅前も閑散としている。「よりまし堂」という店名には、小さな変化でも昨日より明日を「まし」にする選択肢を提案したいとの思いを込めた。地元の市民運動仲間である小川佳代子さんがキッチンを、私が本のセレクトを担当して共同で運営している。

本屋を始めるまでのいきさつをここでは説明しきれないが（興味のある方は「マガジン9」の連載を読んでもほしい）、今回のテーマに引きつけて言えば、自分の住む地域に市民運動の拠点となるような場所が欲しかったというのがある。

この10年あまり、地元の仲間と一緒にさまざまなイベントやミニ上



「マガジン9」に連載中の
『編集者だけと本屋になってみた日記』
<https://maga9.jp/category/iwashita/>



映画などを企画してきた。だが、公共施設を借りようとする、何か月も前から抽選に応募する必要がある、テーマが政治的とみなされると貸してもらえなかったりして使い勝手が悪い。場所を転々とするため参加者との関係が継続せず、大多数の住民には認知されないまま終わってしまう。使いたいときに自由に使えて、社会的なテーマに関心がある市民が集える拠点のようなスペースがあればいいのに……と長らく思っていた。

一方で、独立系書店と呼ばれる個人経営の本屋が近年各地に生まれている。店主のこだわりを反映した選書売りにし、反差別やフェミニズムなどの姿勢を明確にした店も多い。いつか自分もそんな本屋を開けたらと夢想していたが、その頃はまだ会社を辞めるつもりもなく、定年後のお楽しみ程度のつもりだった。

ところが、訳あって会社を辞めることになり、フリーランスでやっていくか再就職かで決めきれずにいたところへ小川さんから「本屋がやりたいなら一緒にやらない？」と誘いを受けた。小川さんは障害者福祉の世界で働きながら、「女性が一人で飲める」「障害がある人でも遠慮せず楽しめる」お店という夢を長年温め

ていたのだ。

本屋をやるならカフェ併設が理想だと思っていたが、自分は飲食店の経験はゼロ。店舗をシェアする形で、小川さんにお任せできたら理想的だ。日常の中で政治や社会、個人のことを語れる場をつくりたいという思いも一致した。こうして1年前には予想もしなかった「お店」の経営に乗り出すことになった。

「SNSアクティビズムの限界」

こうしたリアルな「場」を求める背景には、自分自身がこの数年で、SNS中心の運動に限界を感じていたことがあったと思う。2009年からTwitterを利用し始め、長らくヘビーユーザーであり続けた。とりわけ3・11以降は切迫感かられるように情報を追い、デモの情報を見つけては参加し、Change.org¹で署名し、有益そうな情報を片端からリツイートした。自分にとって社会運動とSNSは不可分だった。

個人が政治的な意見を明らかにすることが忌避される日本社会で、SNSはリアルな生活で表明しにくい危機感や問題意識を共有できる仲間を見つけ、行動を起こすのに役立った。当初は地域の知り合いは多くな

かったが、SNSを介して次第にながりが広がった（小川さんもその一人だ）。

しかし、しだいにSNSは敵対の場となり、個人攻撃やデマによる中傷が度を越してゆく。とりわけ攻撃の刃を向けられるのは民族的マイノリティや性的マイノリティ、そして女性たちだった。差別や人権侵害をやめさせたくて声を上げたことが、かえって弱い立場の当事者をさらなる攻撃に晒してしまうことも一度ならずあり、やましさを感じていた。

Twitterの拡散力や、多様な論者が常に参加している「公共性」を代替しうるツールは他になく、使い続けていたが、しだいに虚しさも感じられるようになった。投稿内容が同じでも、プラットフォーム²側のアルゴリズム³変更ひとつで拡散力はたやすく変化する。初期の頃はそこにも一定の法則性があり、フェアな言論空間が成立しているように思えたが、その幻想はしだいに色褪せていった。決定打は起業家イーロン・マスクによる買収だ。「X」なる意味不明の名称変更だけでなく、差別的投稿や虚偽情報がますます放置され、マイノリティが発信することは危険を伴う場になっていった。利用し続けることと自体がバックラッシュ⁴への加担



(左) 工夫をこらしたレイアウトに、セレクトされたさまざまな本が並ぶ。
(上) 店内イベントも月に数回行う。この日は国際協力コーディネーター、佐藤真紀さんの「コーヒーとビールから始まる中東の歴史と今のお話」。
(写真提供: よりまし堂)



になると考えて、退出を宣言した。いかに公共性が高いSNSでも、いち企業のサービスである限り、資本の力でいかようにも歪められてしまう現実を見せつけられた。

Twitter(X)だけではない。YouTubeには陰謀論や排外主義を煽る動画が溢れ、途方もない再生回数を稼いでいる。閲覧数で広告収入を稼ぐビジネスモデルのもとでは、内容の正確さや社会への影響の善悪よりも、人の不安や敵意を煽るコンテンツのほうが増殖していく。リベラルな論者や報道機関がまっとうな言論で対抗しようとしても、歪んだ構造のもとでは圧倒的に不利なのだ。ここでもネット上の対抗言論に限界を感じるが増えた。

フェイクニュースや排外主義にネット上で反論することも必要だが、それを見る多数派のオーディエンス(読者・視聴者)に冷静な判断力とリテラシー⁵がなければ、まともな言論はバッシングによって孤立してしまう。健全な土壌がなければ健全な作物は育たないのと同じだ。では、その土壌の栄養分となるものは何か。

書籍は、技術的には最も原始的なメディアだが、そこに過去何百年の知の蓄積が反映され、間違いがあれば

訂正する責任が生じ、後の世代からも検証されうるという点で、比較的情報の信頼性が高い。もちろん怪しい内容の本もあるが、評価を受けて何十年も残っていく本は、やはり確たる裏付けと作り手の責任のもとに送り出されている。そうした信頼できる本の存在を人々にできるだけ知ってもらうことが、ヘイト言説やデマに流されない市民を育て、言論空間の劣化に歯止めをかけるのではないか。小石を積んで堤防の決壊を防ごうとするようなものだとしても、自分にはもっとも着実な方法に思えた。

自由な言論のために、 フェアで安全な空間をつくる

そんな思いを抱きながら、本屋を開業することになった。選書で心がけているのは、主流メディアでは取り上げられにくい少数派の声を代弁する本をなるべく多く置くことだ。もちろん、特定の国や民族への敵意を煽動する「ヘイト本」は置いていない。

参照したのは「セーフスペース」という考え方だ。これは、もともと欧米の社会運動の中で、デモや抗議行動などの場で女性やマイノリティが安全を感じられる場所を

確保するという考えから来ている。千葉県幕張で「本屋lighthouse」⁶を営む関口竜平さんは「本屋はセーフスペースであるべきだ」という考えに立ち、差別や偏見を強化する本を置かず、誰もが安心して来店できる店をめざすと宣言している。私もこの姿勢に見習った。

しかし、本屋がそうした立場を表明すると「偏っている」「思想が強い」などと言われることもある。客に主張を押し付けず、右から左までどんな本も置くのが「言論の自由」だというわけだ。しかし、マジョリティ（典型的には日本生まれで日本国籍を持ち、異性愛者の成人男性）の関心やニーズに沿う本ばかりが平積みされ、それ以外の声が隅に追いやられている店のほうが、一步離れて見ればバランスが悪い可能性はないだろうか？ 一時期「嫌韓・嫌中本」や「日本スゴイ本」が店頭に溢れていた日本の書店は、海外から来た人の目には異様に映っていたはずだ。

野放しの「自由」ではなく一定のルールと公正さを担保するファシリテーション⁷が不可欠だ。本屋においては、書店員がどんな本を選ぶかがそれに相当する。

リアルな「場」の可能性

実際に店を始めてみて感じるのは、こうした場が、市民どうしの交流や発信のためのメディアとしても機能するということだ。お客さんの中には、もともと社会問題に関心が高い人もいれば、たまたまお茶を飲みにきた地元の人もいる。声高に主張を押し付けられることを嫌う人でも、同じ空間で食事をしながら、互いの興味関心を聞き合う中で、自然と「そんな問題もあるんだ」と気づきを得ることもあるだろう。棚に並んだ本にも、そんな会話を触発する効果がある。

他方で、一人で訪れたお客さんがカウンターで飲みながら、自身のセクシュアリティや民族的ルーツを問わず語りに打ち明けてくれることもある。本のセレクトや接客など店全体の雰囲気から「ここなら大丈夫そうだ」と感じてくれたのかもしれない。こうしたことがあると私たちはとても嬉しい。

外国人やLGBTQの人々をモニターのように描く言説に影響された人々に対して、説得や「論破」によって敵意を解こうとしても難しい。しかし、こうした普段使いのお店で、互いに生活者として出会うことができれば、何よりの解毒剤となると思うのだ。もちろん無理にカミングアウトを強いてはならないし、私たち自身がまず安心感を提供できるが問われる。いわば「こんなふうに共生できるんじゃないでしょうか？」という姿を、私たちが日々実践することが最大の発信なのだ。

……などと大風呂敷を広げたが、私たちのお店はローカルの小さな取り組みにすぎない。願わくば、日本中にこんな場ができれば、社会の雰囲気も、市民運動への偏見も変わるのではないだろうか。もちろん、それが本屋である必要はないし「店」でなくてもいい。多様な人々が多様なまま、ひとつの場を共有する。そ

れはどんなに小さくとも「公共」の場となりうるし、その経験こそが民主主義の感覚を育てるのではないだろうか。私たちの店はまだ船出したばかりだが、そんな試みとしても見守っていただけたら嬉しい。

*1 オンライン署名サイト。

*2 多数の人が利用するSNSなどの基盤となるシステム。ここでは、それを運営する企業をさす。

*3 SNSなどがどのように動作し、利用者にどんな内容を表示するかを決めるプログラムの計算方法。

*4 社会運動に対する反動や揺り戻しを指す。

*5 目的に沿った情報検索や収集を行い、適切な情報を取得・理解したり、取捨選択して活用する能力。

*6 左記QRコード参照。

*7 会議やグループ活動を円滑に進める手法。



lighthouse



岩下 結（いわした・ゆう）

1979年生まれ。編集者、よりまし堂・本屋担当。出版社で20年あまり、人文社会科学・ノンフィクション・児童書などの編集に携わる。2024年に退職してフリーランスに。2025年4月、東京都日野市・南平駅前にて「本屋とキッチンよりまし堂」を開業。マガジン9にて「編集者だけど本屋になってみた日記」を連載中。

「よりまし堂」訪問記



京王線南平の駅を降りる。駅の周辺には畑もある。私鉄沿線ののどかな光景が広がる。

「よりまし堂」の看板が見えて来た。カエルのキャラクターが描かれている。店主である岩下結さんの娘さんがカエルの絵を、小川佳代子さんの娘さんが字を書いた看板だそう。ほんわかとした空気が看板を見ただけで伝わってくる。

店内に入ると大学生と岩下さんが和やかに話している。本のラインナップはファンタジーからLGBTQや絵本、多岐にわたる。岩下さんのセレクトは大手の本屋には置いていないような興味深い本ばかりだ。

「街の中に拠点がほしかった」という岩下さんとバリアフリーな飲食店を始めようとしていた小川さんが出会い、コラボでできた「よりまし堂」はブックカフェ、というよりもごはんがおいしい本屋さん、というイメージだ。



正直、ちょっとだけ拍子抜けしたような感覚も。勝手に個人的にもっとゴリゴリな感じを想像していた(ごめんなさい)。

オープンして数ヶ月とはいえ、こんなにちゃんとこの街に馴染んでいる感じがする「よりまし堂」さんはすごいなと。編集者でもある岩下さんのラインナップの本の中から著者とのトークイベントのチラシも置かれている。そしてなんと言っても食べ物おいしく、メニューにもこだわりが感じられる。パーフェクトだ。

たくさんは語られないが、ここに至るまでには、山も谷も葛藤もあったと推察する。ネットが発達し、伝達のスピードは驚くほど速くなった。自分で考えなくてもAIが考えてくれる。その便利さも暴力的なところも含めて、溢れかえる情報と上手く付き合うことの難しさ。ネットで本は買える。だからこそ一周回って本屋にたどり着いたことは偶然が重なったとはいえ必然であったようにも思える。編集者である岩下さんは訪れた人が本を見たときのいろいろな反応、手触りが見れることは幸せな瞬間と話していた。地域の居場所をゆるく続けている身としてはいたく同感する。

メニューの中に「バンプルコーヒー」なるものをみつけてオーダーしてみる。オレンジジュースの上にアイスコーヒーがのっている。オレンジ色とダークブラウンが重なり、涼やかで美しい。かき混ぜて飲んでみるとオレンジジュースでもない、アイスコーヒーでもない、別の味が口の中に広がる。新鮮な味わいだ。

ネットを活用して色々な情報を収集することも、本を手にとって読む、という行為も情報との付き合い方は人それぞれ。どちらかがダメでどちらかが良いということではない。このバンプルコーヒーのように溶け合うことができれば。私たちの生活のすぐ隣に、岩下さんと小川さんが大切にしている、より「まし」な暮らしがそこには待っている気がする。



小池良実（岡さんのいえTOMO・オーナー、本誌編集委員）

～活動団体インタビュー～

どうしていますか？情報発信

自ら発信してつながりや共感の輪を広げ、活動を展開させていく市民活動。

情報発信に臨む姿勢も、選ぶ手段も、団体ごとにさまざまです。

ここでは、3団体に日常の情報発信についてお話をうかがいました。

市民活動の生命線とも言える「情報発信」、みなさんの団体はどうしていますか？

case 1

ひと声の距離感を大切に、
つながる手段を途絶えさせない発信を



こども食堂がるまる

毎月4回、3か所で開催する、こども食堂がるまる(以下、がるまる)。SNSと手作りのチラシで発信。

——普段がるまるではどのような発信方法を行っていますか？

Facebookとタイムライン(現:LINE VOOM)を使用していま



したが、1年前から利用者さんに勧められてInstagramも始めました。一度食堂に来たことがある家庭には、団体としてではなく私個人として開催情報のLINEを送るようになっています。LINEを送るのは98%子育て家庭です。残りは独居高齢者、ボランティアさんからケアラー家庭、独居高齢者に連絡してもらっています。ボランティアリーダーの声掛けで、南アフリカから難民認定で入国している家族も受け入れています。

ただ単に情報を流すのではなく「今日あるけど来る?」「持ち帰りだけでもいいよ」と敷居を高くしないように気を付けています。また、LINEでは、自身の近況もたまに送るようにして、こども食堂へ来てほしい感じを前面に出さないようにしています。

FacebookやInstagramは開催後の報告をしており、LINEと使い分けをしています。

あとはチラシも作成しています。会場を借りている生活協同組合や特

別養護老人ホームに掲示していただいています。認定NPO法人キッズドアさんとも連携しているので、配布してもらったり、ボランティアさんに渡して撒いてもらったり。あまりSNSを見ない層へも情報を届けるようにしています。

——情報発信する際、どんなことを工夫していますか？

FacebookやInstagramへ投稿する際は炊飯器の中の写真や食材など、居場所や食事の雰囲気がかかるように心がけています。顔写真を掲載する際は必ず本人に許可を取っています。

また、批判的な発言をしない、個人的な意見を述べない、自分の性格を出さないように気を付けています。

SNSを見ているこども食堂の利用者さんが、様々な制度があることを知り、他の中間支援組織¹とつながりがもてるように、中間支援組織や行政などの情報を幅広く拡散しています。SNSはこども食堂を利用している方だけではなく、同じこども食堂を運営している団体にも見ていただけているので、情報拡散や掲載のお願いが来ることもあります。



(上・前ページ) ども食堂の活動の様子 (写真提供: ども食堂がるまる)

— 情報発信を通じた経験や大切にしていることを教えてください。

よかったことは「知っている子が楽しそうにごはんを食べている様子をSNSで見えて来ました」と言ってもらえる方がいたことです。そのほかにも企業や個人から寄付の問い合わせがあったり、ボランティアがしたいという問い合わせもありました。困ったことは、スパム²のDMが来ることです。AIがすぐく発展していて、フェイクの情報も溢れているので、そこは気を付けています。AIアルゴリズム³が学習してしまうので、いいねを押す内容も選んでいます。

人と出会う、つながるには慎重にしなければいけないですが、積極的につながるとうとしないとながれないます。だけど、アピールしすぎても引かれてしまう。その距離感は気を遣いながら情報発信をしています。

*1 NPOや市民活動団体の活動支援をしている民間組織。

*2 迷惑メール。クリックすると詐欺サイトに誘導されるようなものも多い。またウイルス感染等のリスクも。

*3 AIの知性のもことなる「学習のしくみ」のこと。

case 2

SNSも、従来からのツールも大切に

岡さんのいえTOMO



民家を活用した、地域の居場所・岡さんのいえTOMO。ウェブサイトやSNSのほか、しんぶん看板で発信。

— 岡さんのいえTOMOの情報発信ツールについて教えてください。

年1回のしんぶん発行、メール、

ウェブサイト、Facebook、そして最

近始めたのがInstagramです。とは

いえ、のべつまくなしに更新してい

るわけでもありません。毎月第1水

曜日、第3水曜日15時からどなたで

もどうぞの「開いているデー」をやっ

ているのでこの告知は必須です。が、

開いているデーの中は駄菓子屋と屋

内では高齢者向けの体操、という内

容なので駄菓子屋の常連である小学

生は岡さんのいえに貼ってある小

さな看板に「次回の駄菓子屋は〇日

です」をチェックして来訪するし、

高齢の方はどなたかのお誘いでい

らっしゃいます。つまり利用者さん

がウェブサイトやFacebookなどを

チェックする率はとても低いですね。

ウェブサイトのカレンダーは共有

— 発信はしつつ、対面や口コミも大切にされているんですね。

どれも原則的には世界中に開いています。見たい人見てね、というスタンスです。私を含め、スタッフは割合のんびりしているので、管理をしてきている担当者にこれ以上負担をかけない在り方。たぶん現時点で充分、大変ですが笑。これもまた長くゆるく続けてきた結果のカチだと思っています。



岡さんのいえTOMOLしんぶん



にじーずのサイトには
にじーずを紹介する素敵な
イラストが掲載されている。
(画像提供：にじーず)

case 3

バッシングとアカウント閉鎖を越えて

一般社団法人にじーず



10代から23歳までのLGBT(かもしれない人を含む)が集まれる居場所を全国16都市とメタバース¹で開催する、にじーず。インターネット上での発信が中心。

——にじーずでは、どのような手段で情報を発信していますか。

まず、ウェブサイトがあります。情報を届けたいのはおもに10代、大学生くらいのにじーずを利用したいと考えている当事者です。インターネット検索からウェブサイトにたどり着いて活動に参加する人が多くいます。それからInstagram。どちらかというとInstagramは自分の好きなものをフォローする媒体なので拡散力はそう強くはないですが、ある程度はみてくれています。それと一番大事だと思うのが、口コミです。にじーずのチラシを見た学校の先生が紹介してくれたり、友だちが「にじーずはすごく楽しかった」と言っているとか、SNSでフォローしている人がいつも行っているとか、そうした実際に参加した人のコメント

がはじめての方の後押しになっています。

——団体設立当初はTwitter(現在のX)をつかっていたそうですね。

LGBTの若者は匿名性が担保されるSNSでつながりやすく、私たちも当初は「Twitterをメインにしていました」「質問箱²」というオンラインサービスをつかいはじめた頃は「にじーずの居場所に何を着ていったらいいですか?」とか、「スタッフさんの最近楽しかったことを教えてください」とか、たわいのないやりとりがスタッフとの間で行われていました。なかには「理解がない親にどう接したらいいのか」といった声も寄せられ、悩みに答える場としても機能していました。

コロナ禍になり、多くの団体が活動を休止するなか、場を閉じてしまうと居場所がない人たちに對してさらに危ないことが起こると想像できたので、対面での居場所の活動は続けました。ただ「感染したらLGBTであることがバレてしまう」と不

安を抱く人や、遠方の人もいることをふまえて、オンラインでのやり取りも強化しました。そうした経緯から「質問箱」のサービスを週2回匿名での相談の機会として位置づけることにしたのです。行く場所がなく、本当に苦しい人たちがつながる時代でもありました。

その後、LGBT理解増進法³という法案が議論されるようになると、相前後して「Twitter上に嫌がらせの書き込みが増えました。悩みを相談するために投稿したにもかかわらず心ない引用コメントが付けられて利用者が傷つく可能性があり、しかも公開でしたので周囲に晒されるわけです。そこで、オンライン上で相談を受けることをやめました(2022年7月)。ちょうどこの頃、LINE相談⁴など他のサービスが充実し始めたこともやめた理由のひとつです。

その後も心ない投稿や嫌がらせ目的の書き込みが続く、発信者がますますエスカレートすることが考えられ、何よりそれを見る利用者に良くないと思ってTwitterのアカウントを閉じる判断をしました(2023年6月)。書き込みだけでなく実際の居場所に来て嫌がらせをしたり、活動を邪魔したりということが懸念



LGBTQ+のシンボル「レインボーフラッグ」と、
にじーずスタッフの方々。(写真提供：にじーず)

される事態だったのです。

——Xのアカウントを閉じる際、声明を出されました。それはどんな内容だったのですか？

「子どもが洗脳される」「性的虐待が行われている」「保護者と敵対的である」といった事実に対する書き込みの一つひとつについて、私たちの見解を示す形で声明を出し、最後に「にじーずは活動を継続していきま

す」と結んで、利用者の皆さんには今後も変わらずサービスを提供することを伝えました。

また、保護者に相談せずに利用する若者がいることについては、インターネット上で批判的な声もみられました。私たちは、家庭で十分な理解を得られず苦しんでいる若い当事者こそ支援を必要としていることへの理解が広がってほしいと願っています。

嫌がらせを止める意味ではXのアカウントを閉じた効果はありました。その際に私たちが注意をしたのは、にじーずの活動をよく知らずにネガティブな情報を拡散する人たちの存在です。その人たちは話せばわかってくれる可能性があります。それ

から、行政の方や子どもを連れてきてくれる保護者の方、あるいは寄付してくださる方、助成してくださる団体、私たちが研修をした子ども若者支援団体など、もともと関心を寄せてくださっている方たちにきちんと説明をしました。その方たちが「問題がない団体(にじーず)と一緒にやっている」と胸を張って言えるように、あらためてご理解をいただくようお願いしました。

加えて、ボランティアスタッフを守る必要がありました。バッシングを激しく受けていた頃はおよそ70名のボランティアスタッフがいましたが、にじーずの活動に反対する人や悪意がある人が活動先に来ることとも予想され、その最前線に立たされるのがボランティアスタッフです。ボランティアスタッフの不安をなるべく減らすようにQ&A方式で内部資料をつくり、バッシング対策班を結成してすべてのリスクに関する情報を集約させるなど対策をとりました。

——これまでのご経験を経て、情報を発信するうえで大切にしていることを教えてください。

バッシングの渦中にあっても、自分たちのコアのメッセージに戻ると

いうことを大切にしています。SNS上で一方的に疑いをかけられたとき、情報が間違っていないでも濡れ衣をはがすことは難しいと実感しました。「虐待している団体ではない」という伝え方だけではなく、「社会全体でLGBTの若者を孤立させない」という自分たちのメッセージを合わせて伝えていきます。

LGBTの若者は存在すら気づかれず、学校でも家でも、自分のことを言えなくて、1回でもいいから自分と同じような人と話してみたいと語る人が多いです。ひとりでも話を聞いてくれる人がいたら、どれだけ救われるか。SNS上では対立軸にしか目がいかなくなりがちですが、本当の課題を示したいです。だからこそ、伝えていくことを諦めずに頑張らなきゃと思っています。

*1 スマホやパソコンで他のユーザーと交流できる仮想3次元空間。

*2 「Peer質問箱」。XなどのSNSと連携して使える質問箱サービス。誰でも匿名で質問することができる。

*3 性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性に関する国民の理解の増進に関する法律。2023年6月施行。

*4 LINEを活用した相談サービス。相談機能を持つ団体等により運営されている。



川上浩司 著 / 岩波ジュニア新書 2019年
880円+税 / ISBN : 978-4-00-500891-9

不便益のススメ 新しいデザインを求めて

「不便益」とは、不便にすることで得られる益や価値のことだそうです。幼稚園の園庭をデコボコにしたら園児たちがいきいきとしてきた、紙の辞書で調べたら関連情報まで知ることができた、など、不便だからこそ楽しみや学びを得られたという事例が紹介されています。

留意すべきは、懐古主義ではないということ。効率一辺倒では新たなものは創れない、費用対効果は低くてもやってみようよ、ということだと思います。たとえば、著者は、歩いた道が画面上でかすれる観光用ナビをつくったそうです。すると、通常のナビを使った人よりも風景を覚えている率が高かったとのこと。また、大英博物館が所蔵作品をインターネットで公開したら、わざわざ来館する人が急増したそうです。「デジタル空間での出会いが『関心を持つ契機』となった」と著者は言います。

便利な情報化社会と不便益は両立できると言えるのではないのでしょうか。市民活動でもインターネットを活用して発信するのが当たり前になっていますが、その発信を見てボランティアとして参加するなど、“わざわざ”行動する人が増えるきっかけともなっています。「手間がかかる」ことはポジティブな未来の入口になる！……と言ったら大げさでしょうか。

あわせて読みたい2冊——編集部の書棚から

とびこえる教室

フェミニズムと出会った僕が子どもたちと考えた「ふつう」

今回の特集で寄稿していただいた岩下さんと小池さんおすすめの1冊。

「男らしさ」を要求された自身の子ども時代の生きづらさを振り返り、そこから生まれる感情と向き合うことから著者の語りが始まります。子ども時代の経験から生じた問題意識を抱えて教師になった著者は、「ふつう」を問いかける「生と性の授業」を行い、子どもたちが社会の枠組みを変えていく力を培うことを目指します。カリキュラムを準備せず、教室での出来事をきっかけに、子どもたちにとって効果的なタイミングを図って授業を行っていくのが印象的です。

今回の特集と関連して注目したいのは、第4章の「トーンポリシング」の部分。トーンポリシングとは、問題を提起した人の発言に対して、その内容ではなく態度や言い方等の批判により本来の論点をずらしてしまうことで、SNS上のマイノリティの発信に対しても見られることがあります。著者は、自身の反省も交え、トーンポリシングを3つの型に分けて分析しています。

著者の語りから生まれたこの本は、マイノリティだけでなく誰もが自分の生きづらさを語ることで、他者とより誠実に向き合い、社会を良くしていくことができるのではないか、と希望を灯してくれる1冊です。



星野俊樹 著 / 時事通信社 2025年
1,700円+税 / ISBN : 978-4-7887-2049-7



寄稿

フェイクニュース時代を生きるために必要なこと

山脇岳志^{たけし}（スマートニュースメディア研究所所長）

インターネットの草創期には、「多くの人が時間と空間を超えて意見交換することができ、もっと民主的で良い社会になる」といった明るい期待がありました。それから30年、たしかに誰もが簡単に発信できる時代になっていますが、SNSや動画投稿サイト（以下まとめてソーシャルメディア）には

有用で楽しい情報ばかりではなく、虚偽情報や攻撃的な意見もあふれ、私たちの社会に少なからぬ影響を与えています。

国内外の選挙でも、ソーシャルメディアをうまく活用した政党や候補が躍進、当選するケースが増えてきました。これまでの選挙活動では届かなかった層にメッセージを届けられるポジティブな側面がある一方、感情的な対立が激しくなる例も見受けられます。感情的な対立が深まってしまいう社会では、事実かどうかよりも、相手候補

補やその支持者を叩きのめす言動が歓迎され、虚偽ニュースが広がりやすくなります。虚偽の投稿は真実の投稿よりも6倍早く広がったというアメリカの大学の研究もあります。

—情報との付き合い方

虚偽情報・真偽不明な情報がある世の中で、どうやって、真偽を見分け、情報と付き合い合っていくのがよいのでしょうか。まず、一つおさえておきたいのは、マスメディアとソーシャルメディアの情報を区別して付き合うことです。

マスメディアといってもいろいろありますが、私が34年間仕事をしてきた新聞を例に取ります。新聞社は、記者本人だけでなくデスクや校閲といった部門も含め、事実を確認するためのチェックシステムを社内を持ってしています。また、誤報を出した場合は、訂正やお詫びを出すのが一

般的です。新聞も人間の集団が作っている以上は誤報もありますし、新聞社によって報道ぶりに保守的、リベラルといった価値観やバイアスが顕著に現れるケースもあります。なので、新聞が報じることは「すべて真実だ」と受け止めることがよいわけではありませんが、新聞社が流す情報は、何重にも確認が行われているケースが多いです。

一方、ソーシャルメディア上の情報は、必ずしも何重にもチェックを受けているわけではなく、事実関係が間違っていることも訂正されないケースが大多数です。もちろん、その道の専門家が素晴らしい内容を発信しているケースもあります。が、誰もチェックしていない不確かな情報、虚偽情報や陰謀論も流れ、まさに「玉石混交」です。インフルエンサーといわれる有名人の言説であっても事実確認をしていない情報が多いことには注意が必要です。メ

ディアの種類によって、流れる情報の特徴に違いがあるのです。

「いつ『ふくえび』発売？」でチェック

ここで、情報の信頼性について考える時のヒントとなる「チェックリスト」をご紹介します。アメリカの図書館や大学で使われている「CRAPテスト」の中で、特に大事だと思う「確認ポイント」を5つ挙げたものです。

① いつ発信されたものか

発信・投稿された日時、更新の有無などを確認

② 複数の情報源で確認する

一つの情報源だけで判断していないか。複数で確認できたか

③ エビデンス(証拠)はあるか

例えば科学的な話題なら、権威あるジャーナルに引用されているか

④ 発行元(媒体)や発信者は誰か

信頼性はあるか。有名な学者でも専門外の分野では見当違いもあり得る

⑤ (発信された情報の)

バイアスや目的を考える

セールス、宣伝、勧誘……発信者の狙いはなにか

5つの頭文字をとって、「いつ・ふく・えび・はつ・ばい」↓「いつ『ふくえび』発売？」でチェックすると、虚偽だと見抜けるケースもあります。

ただ、このリストを使っても真偽が分からないことは多い上に、生成AIの発展でますます虚実は見分けにくくなっています。そもそも、情報は真実と虚偽に二分されるものではありません。いくら調べても真偽が分からないグレーな情報が膨大にあるのです。上智大学の佐藤卓己教授は、グレーな情報については「あいまいに耐える」、つまり「ほうっておくほうがいい」と提案しています。災害時や選挙期間は、虚偽情報や真偽不明な情報が広がりがちですが、いったん立ち止まって考えてみたり、少なくとも人に広めないように心がけたりすることが大切だと考えます。

クリティカルシンキングとは

「吟味思考」

「いつ『ふくえび』発売？」リスト

を使って情報をチェックしたり、あいまいに耐え立ち止まって考えたりすることは、クリティカルシンキングのスキルを磨くことにつながります。クリティカルシンキングとは、物事を多角的・複眼的に見たり、自分の考え方を内省・吟味したり、証拠に基づいて論理的に考えることです。「批判的思考」という定訳があるのですが、「よく考えた結果、相手の意見を肯定する」のもクリティカル

シンキングです。「批判的思考」は誤解を招きがちな訳語なので、私は「吟味思考」と訳しています。吟味思考は、自分とは異なる意見や文化を持つ人との「対話スキル」であるともいえます。社会の「感情的対立」を緩和するためにも、私たち一人一人が「吟味思考」を身につけていくことが大切な時代になっていると思います。



山脇岳志(やまわき・たけし)

スマートニュースメディア研究所所長
1964年、兵庫県生まれ。京都大学法学部卒。1986年、朝日新聞社に入社。経済部記者、ワシントン特派員、論説委員、GLOBE編集長、編集委員などを歴任。2013年から17年までアメリカ総局長を務め、トランプ氏が最初に大統領に当選した選挙を取材した。2020年にスマートニュース社に転職し、22年から現職。メディア情報リテラシー教育を研究・実践するほか、世論調査の企画・運営にも携わっている。近著に『SNS時代のメディアリテラシー』(筑摩書房)



『SNS時代のメディアリテラシー
——ウソとホントは見分けられる?』
山脇岳志著 / 筑摩書房
1,200円+税
ISBN : 978-4-480-25154-1



児童福祉施設だけではなく、NPOや企業、社会福祉協議会、行政も参加し、子どもたちのためにつながった。

『全国若者自立支援プロジェクト』報告書より ～社会的養護が必要な子どもたちの自立支援ネットワークづくり～

東京ボランティア・市民活動センターはゴールドマン・サックス（以下、GS）とNPO法人NPO STARS（エヌピーオー・スターズ）と一緒に、社会的養護が必要な若者たちの自立を応援するために、多様な支援者のネットワークをつくる『全国若者自立支援プロジェクト』に取り組みました。今号では、その2年間のプロジェクトと、それに先駆けて、本センターがGSと15年間取り組んできた『進学支援プロジェクト』について振り返りたいと思います。

■GS『進学支援プロジェクト』の始まりと目指したこと

本センターは世界的な金融機関であるGSと協働し、「子どもの貧困」をなくすために、2010年に『進学支援プロジェクト』を開始しました。本事業の始まりは、児童福祉施設でボランティア活動をしていたGSの方々が、この子どもたちが高等教育を受けることによって人生の選択肢が広がることに気がついたことからでした。当時は給付型の奨学金の数も給付額も少なく、児童福祉施設の子どもたちが4年制大学に行くことは「夢」でした。また、大学に

進んでも、アルバイトをたくさんしなければならなかったり、施設出身であることを周りに伝えることができずに孤立したりして、中退する学生が少なくありませんでした。

そこで、『進学支援プロジェクト』は、都内の児童養護施設、自立援助ホーム、母子生活支援施設、児童自立支援施設の4種類の児童福祉施設の子どもたちを対象として、大学進学支援事業、高校生支援事業、中学生支援事業、小学生支援事業の4事業を実施しました（次ページ図1）。そして、それぞれの事業にはGSの役員・社員が参加し、多彩なNPOと協働しています。

まず、大学進学支援事業は、都内の児童福祉施設の子どもたちで、書類および面接で選考された3名の学生に対して、「行きたい大学」の授業料やテキスト代を全額給付するとともに、交通費の実費と生活費（月額7・4万円程度）を支給し、アルバイトで月4・5万円ほど稼げれば、授業にも出て、サークル活動もできるような経済状況を保障しました。また、奨学生が孤立したり、困ったときに相談できるようにと、出身施設の職員が月1回面談するとともに、本センターのケースワーカーも月1回面談しながら、「両輪で」奨

GS進学支援プロジェクト

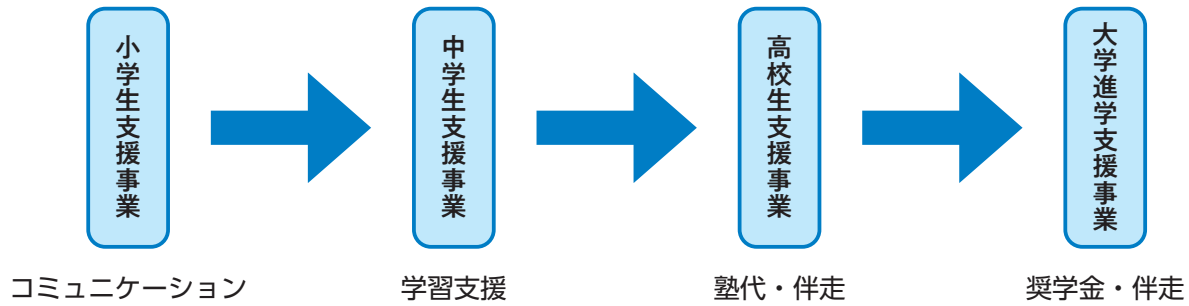


図1

学生に伴走したのです。しかし、大学に進学してからもさまざまな課題があり、担当職員の皆さんとケースワーカーは奨学生の情報を共有しながら、年に2回の担当者連絡会を開催し、それぞれの経験から学ぶ場を用意しました。

そして、高校生支援事業では、4年制大学に入るための塾代とケースワーカーの伴走を行い、施設を出て大学に入る前の関係づくりを行いました。また、中学生支援事業では、認定NPO法人キッズドアの大学生ボランティアがチームをつくり、施設に月2回、6か月間訪問して、学ぶことの楽しさや大学の魅力を伝えてくれました。さらに、小学生支援事業では、人間関係が上手くいかず「学校に行きたくない」という子どもたちを減らすために、NPO法人JAMネットワークに協力していただき、コミュニケーションのワークショップを実施したのです。

社会的支援の充実と アフターケアの必要性

2008年に阿部彩さんの『子どもの貧困』が岩波新書から発行され、その後、日本の子どもの多くが相対的貧困の状況にあることに大きな社

会的関心が集まりました。そして、本プロジェクトについても、厚生労働省、文部科学省、自治体、大学、助成財団、NPOなどからヒアリングがあり、多様な奨学金や支援が広がっていきました。2020年には、本プロジェクトとほぼ同様の内容の奨学金制度を国がスタートすることになったのです。また、翌年には、「自立支援担当職員」が児童養護施設のみならず、母子生活支援施設、自立援助ホームにも配置されました。

そんな中、2020年4月からは、新型コロナウイルス感染症が日本を襲い、学生たちが大学にも行けず、アルバイトもできないためにお金がないという状況になりました。そこで、GSと全国の児童福祉施設の有志が立ち上げたNPO法人NPO STARSと相談し、全国の児童養護施設から退所生に食料や消費用品、マスクなどを、手紙をつけて送るという『アウトリーチ・プロジェクト』（報告書はQRコード参照）を実施することにしました。本プロジェクトには、187か所の施設にご協力いただき、2509人の退所生が施設とつながることができました。その際に実施したアンケートには1871人の退所生が回答し、そこには、困窮している様子やSOS

が出せずに孤立していることが書かれていました。この取り組みで明らかになったのは、退所生への積極的なアフターケアと、退所生がSOSを出しやすいように施設にいるときからの関係づくりの重要性でした。

自立支援の施設間格差と 地域間格差

前述したように、『進学支援プロジェクト』は、ほぼ同様の内容の奨学金プログラムを国がスタートしたことから、パイロット・プロジェクトとしての役割は終了したことになります。そこで、再び、GSとNPO STARSと相談したところ、現在では十分な給付型奨学金があり、自立支援担当職員も配置されましたが、児童福祉施設出身の大学生の中途が比較的多いことや、自立支援担当職員の配置やその取り組みに施設間格差があったり、NPOや企業、行政などの支援には地域間格差があることが課題であることを確認



NPO STARS



『アウトリーチ・プロジェクト』報告書 & 『全国若者自立支援プロジェクト』報告書



施設の種別を超えて、自立支援の課題と対応を話し合った。

しました。

そこで、2023年度に『全国若者自立支援プロジェクト』を開始し、まずは、様々な児童福祉施設が全国および8つの地域ブロックでつながるためのオンライン会議を開催。翌年には、それぞれの地域ブロックにおいて、児童福祉施設のみではなく、子どもたちを支援しているNPOや企業、財団、社会福祉協議会、自治体などの関係者も参加する会議を対面で開催しました。

本プロジェクトの企画・運営は、NPO STARSの会員を始め、全国各地の児童福祉施設の職員の皆さんが中心となり、その地域ニーズを反映した内容で、意見を出しやすい工夫がされています。その結果、2年間で延べ1149名、946団

体にご参加いただき、熱心な協議が行われました。その詳細については、本プロジェクトの報告書をご参照ください（前ページQRコード）。どの会議も参加者アンケートの満足度は非常に高く、「他の地域や他施設の取り組みが参考になった」「児童福祉施設出身の当事者から、こんな支援をしてほしかったという声を聞くことができてよかった」「企業やNPOと連携できることがわかった」というコメントが多くありました。

■ 今後に向けて取り組むべきこと

『全国若者自立支援プロジェクト』の地域ブロック会議の報告や運営・企画委員の振り返りの会から、以下のような取り組みが必要であることが確認されています。

①「自立支援」の意味の共有

「自立」というと、子どもたちが施設から離れ、「立派に成長する」「独立立ち」といったイメージがありますが、子どもたちが社会の中で自分らしく生きていくことが自立であり、そのためには、安心・安全に感じられる場所や、役割を持ち、社会に加えられる機会の提供も必要です。近

年、施設には「進学も就労もしたくない」という、将来への意欲が低い子どもたちも増えていきます。彼ら・彼女らのために、施設にいるときから、職員や社会とのつながりをつくり、退所後も継続的に支援できる体制づくりが求められています。

②当事者の声を聴き、寄り添い続ける支援

本プロジェクトの各会議には、児童福祉施設を退所した当事者の方々にも参加していただきました。そして、自立支援に重要なのは、当事者の声から学ぶということであり、支援者は彼ら・彼女らの辛さ、迷い、希望に寄り添うということが共有されました。

③支援者のネットワークづくりと人材育成

自立支援についての施設間格差や地域間格差を埋めていくためには、児童福祉施設が種別を超えて全国および地域において連携していくこと、また、地域のNPOや企業、行政などの支援者とのつながりが有効です。そのためには、自立支援担当職員の情報交換や研修の場が必要

となります。

④社会的養護についての情報発信

施設で育った子どもたちが、周囲の人たちに「ありのままを話しても、普通に受け入れられる社会」を作るために、社会の偏見をなくし、正しく理解してもらい、自然な形で交流し、支えあえるように、児童福祉施設の職員や当事者が積極的に情報発信していくことが重要です。

この2年間にわたる『全国若者自立支援プロジェクト』を機に、社会的養護が必要な子どもたちのためのネットワークの「芽」が全国各地に生まれました。この動きを広げていくために、次に何ができるのかを参加してくださった皆さんと一緒に考えていきたいと思っています。



『全国若者自立支援プロジェクト』報告書の表紙

『敵』 幻想として表出された心の陰画

瀧澤利行(茨城大学教育学部教授)



『敵』 Blu-ray発売中 価格：6,000円(税抜)
発売元：株式会社ハビネット・メディアマーケティング
販売元：株式会社ハビネット・メディアマーケティング
©1998 筒井康隆/新潮社 ©2023 TEKNOMIKATA
2025年公開 監督・脚本：吉田大八 原作：筒井康隆

実に身につまされる映画である。鑑賞後に自分自身におきかえて考えずにはいられないシャシンであった。『桐島、部活やめるってよ』で高校生の精神世界を描き名を馳せた吉田大八が、今度は「老い」の世界を独特の感覚で作り上げた。しかも原作は数々のSFや『文学部唯野教授』を書いた筒井康隆である。見ないわけにはいかない。

主人公の渡辺儀助(長塚京三)は、フランス近代演劇史を専門とする元大学教授である。妻の信子(黒沢あすか)には先立たれ、祖父の代から住む日本家で一人住まいである。掃除や炊事を自分でこなし、時には行きつけのバーで知人やフランス文学専攻の女子大生(河合優実)と時を楽しんだり、元教え子の女性編集者(瀧内公美)と自宅で夕食を共にしたりするなど、別段孤独で暮らしているわけではない。

自宅まわりの修繕などに手を貸すことを厭わない元教え子もいる。独居の高齢男性としては自立度が高い生活をしているが、彼には職業的な矜持なのか、収入と預金の残高

に見合わない生活をすることは考えの外であり、いつか自らの手でなすであろう「Xデー」を心に秘めて暮らしている。それが故か、美しい動作で過ごす日常の丁寧な暮らしもどこか暗く感じられる。

そうした日々がXデーまで続くかと思いきや、パソコンに届いた一通のメール、タイトル「敵について」を開けたところから物語は大きく動いていく。「敵」が北からやってくる。それ

れを知らなかったための忌避であったのではないかと思ったりする。齟齬は、渡辺自身の心に澱のように存在している過ぎし日の人生への反省や後悔が幻想となって表れているように感じられる。

結局は切なく、また美しく締めくくられるかと思わせるが、最後にぎくりとするシーンを挿入するなど細かい演出が心憎い。

主人公の渡辺が「残高に見合わない長生きは悲惨だから。君もあと何年もつか計算してみたらいい。不思議と生活に張りが出るから」と飲み友だちでもある湯島(松尾貴史)に語るシーンがあるが、このシミュレーションは、実際に筆者自身の父が一人暮らしになった際に、私自身が行ったことであり、実に説得力があった。

筒井康隆の原作にほぼ忠実に映像化されているが、随所で脚本・監督の吉田大八の趣向が加味されており、本当の「敵」とは何なのかを考えさせるような工夫が感じ取れる。このあたり、『桐島、部活やめるってよ』に通じる作劇法がある。しかしながら、「老い」がテーマの本作には『桐島』のような未来に開かれた可能性を感じられるところがない。「明日は我が身」を切に感じさせられた点で、とくに還暦越えの方々には必見願えればと思う。

● エケ陽子さんのプロフィール ●

日本では看護師。カナダへ語学留学やオーストラリアの大学の看護学部で学ぶ。その後、沖縄や喜界島、徳之島で離島ナースとして過ごす。2013～15年JICA海外協力隊員としてベナン共和国へ。そこで出会ったベナン人の夫と結婚。第二夫人となる。日本で息子2人を育てながら過ごし、2023年3月家族でベナン移住。NGO SaluTotaを立ち上げる。



せかいをみる

ベナン共和国は西アフリカにある小さな国。40以上の民族が暮らし、多くの人が綿花を中心とする農業により生計を立てています。そんなベナンへ海外協力隊員として赴任し、8年後に家族とともに移住した人がいます。ベナンで子育てをしたい、ベナン人と歩みたい、そんな思いで移り住んだエケ陽子さんに、ベナンでの日々の暮らしを中心に寄稿していただきました。

寄稿

西アフリカ・ベナンで生きる 農村で暮らす人たちとともに

エケ 陽子

(NGO SaluTota 副代表)

「ベナンの方がいい」——西アフリカにあるベナン共和国（以下、ベナン）へ移住して丸2年が経ち、6歳の長男が初めてこう言った。移住当初は「日本に帰りたい！明日帰る！」と毎日泣いていたのに。冒頭の言葉を聞けて、私は嬉しさと安堵の思いでいっぱいになった。それと同時に、この先もベナンで生きていく息子たちにとって移住の決断はどういう影響を与えていくのだろうか？とも。

● ベナンへ家族で移住

2023年3月、夫の故郷であるベナンへ家族4人で移住してきた。私にとって、2013～2015年JICAの青年海外協力隊員（以下、協力隊員）として過ごした思い出の地に、約10年ぶりに戻ってきた。

ベナンは、日本の面積の

3分の1ほどの大きさで、人口はほぼ東京都と同じ1400万人の小さな国。商業都市コトヌーが大きな発展を遂げ、10年前とはすっかり様変わりした光景に圧倒されてしまった。コトヌーから西へ130kmのところにある地方都市ドボ・トタは、どんなふうに変ったのだろうか？と覚悟の思いでやってきたのだが、大きな変化はなく、村人たちも10年前と大差なく暮らしていた。都市と地方の格差というか違いをまざまざと感じたのだった。

私たち家族が移住してきたのには理由がある。まずは、ここベナンで子育てをしたいと思ったから。協力隊員時代に出会ったベナンの子どもたちは、イキイキとし躍動感があり、好奇心に満ちた表情がとても印象的で、自分の子どもたちにもそういう毎日を味

わってほしいという気持ちが大きくなった。

また、「いつかベナン人たちと一緒に何かをやりたい」と常に頭の片隅で思っていたものの、ただ毎日をこなすのに精一杯で過ぎていくだけだった。

しかし、何がやりたいのかを決める必要はなく、実際にベナン人たちと向き合ってみないと分からない、ということに気が付き、そこからは、外国人である自分が村へ現われても怪しまれず受け入れてもらえるようにNGOという肩書きを持った方がいいという考えにいきついた。

● NGOを立ち上げる

移住後すぐにNGOの申請





NGO SaluTotaではステイ事業もしており、日本人のステイがあると、活動村へ訪問・石けん体験などをしてもらっている。(左上) 石けん作りの女性メンバーたちと。(左下) ベナン食を子どもたちと食べているところ。基本、辛いが美味しい！(右上) ベナンの蒸留酒ソダビはアブラヤシの木の樹液から作られる。アルコール度数45%以上！(右下)

写真提供：NGO SaluTota

書類などは提出したもの、一向に受理されず、イライラが募る日々。結局は、ここベナンではまかり通るコネとお金を少し払うことでようやくその年の10月に申請許可された。私が副代表を務めるNGO SaluTotaは、「農村に暮らすベナン人たちと共に働く場をつくる」をモットーに雇用創出、収入向上、そして、子どもたちの教育支援へとつながっていききたいという思いで活動をしている。特に、現在は女性を対象としている。一夫多妻制が慣習として残るベナンでは、女性と子どもたちだけで暮らす世帯も多く、収入源は夫の稼ぎに左右される傾向があり、女性を対象にしたほうが、彼女たち自身の自立を促し、ダイレクトにその子どもたちへの支援にもつながるからだ。

どちらか既存のものなのは、伝統や風習を守りながら暮らし、保守的で新しいことに抵抗感のある彼女たちのニーズに合っているから。そして、その先に、別の活動にチャレンジしていききたいという思いがある。いきなりやってきた外国人が一人よがりなことはやるべきではないし、ベナンで生きていくことを決めた自分にとって時間がかかって、着実に共に進んでいききたいという気持ち大きい。

● 一步を踏み出せる社会をめざして

一方で、この2年でたくましく育った息子たちは、現地語を巧みに操り、近所の友だちとパンツ一丁で遊び、本気の喧嘩も繰り広げるベナン人へと成長を遂げている。ここでは現地語が第一言語なので、それをあいさつ程度しか理解できない私にとって、通訳もしてくれないたくましい存在だ。6歳の長男は、ゲームやテレビが好きで一人時間もしっかり取りつつ、外で遊ぶときはみんなの中心にいるようなリーダー的存在に。4歳の次男は、人懐っこくて勝ち気で、図々しく逃げ足の速いところ

ベナン人たちと共に働く場
NGO SaluTota



青ヶ島の巻

「墓刈り」という 青ヶ島のボランティア

東京には人が暮らす11の島があります。それぞれの島に住む人に、島での生活やコミュニティ、特長などについてご紹介していただく連載です。

東京都青ヶ島村は、東京から南300キロの八丈島からさらに南へ67キロの太平洋上にある周囲9キロの島で、世界でも珍しい複式火山の島です。定期船は八丈島から週4～5日運航予定ですが、荒波の影響で就航率は50%程度、季節によっては1週間以上欠航が続くことがあります。1日1便ヘリコプターが就航しますが、定員はわずか9名です。交通は不便な島ですが、人口は150人程度と、コミュニティが小さいため島全員が顔見知りという状態です。

さて、そんな青ヶ島でのボランティアの紹介ですが、今回は古くから行われている「墓刈り」を紹介したいと思います。墓刈りと聞くとイメージが付きにくいですが、要は無縁墓の清掃活動です。いろいろな自治体で無縁墓が増加傾向と聞きます。青ヶ島でも同じで、毎年8月の第1日曜日(かつては7月7日)に島民の多くがこのボランティアに参加し、1年の間に伸びた無縁墓周辺の雑草



青ヶ島全景(海上保安庁 撮影)

を取り除きます。

私が参加していた例年の様子では、朝の8時ごろ集合して、



墓清掃の様子

そこからいくつかの班に分かれて、島内に数か所ある無縁墓に行って草を刈り、墓掃除をします。正午前にはすべての墓清掃を終え、島にある清受寺^{せいじゅ}という唯一のお寺に集まります。そしてこの寺の周りの雑草刈りをして、その後、この前の小広場にシートを敷いて昼食会となります(昔は午後にも墓清掃は行われ、大変な重労働でしたが、現在は個人の墓はあらかじめ終わらせておくなどし、簡素化され昼には終了しています)。

参加される皆さんは、この昼食会が楽しみの1つで、旬の料理や、島の郷土料理が振る舞われます。この年初めて来島した教員や役場の職員等は、旬の味に舌鼓をうちます。一緒に汗を流したからこそ深まる、世代を超えた懇親の場です。この行事の後、1週間ほどすると、毎年8月10日に行われる島で1番大きいお祭り「牛祭り」があります。この祭りの前に島のなかの雑草を刈り、スッキリさせるというねらいもあるようです。

夏の訪れを感じさせる青ヶ島にとってはとても大切な年中行事です。

(青ヶ島村教育委員会 田中孝明)



イラスト：ひびのさなこ

ネットワーク

本誌のバックナンバーは
右記からご覧ください。



～本誌396号より～

読者の声



読者の皆さんからいただいたアンケートの一部をご紹介します。

◆【特集】めざせ！ごみ捨て名人

・都市の人口は今以上は増えないと思いますので、プラスチック・紙を交えて焼却していく方向が良いのではと個人的には思います。個人にごみ捨て名人になるようにうながすのでなく、だれもが捨てられるような方策をとるべきだと思います。

・一言にごみと言っても、さまざまな視点があり勉強になりました。個人単位でできることが沢山あることが分かったため、「私ぐらいいいか」と思わずに、一つ一つのことについてしたいと思いました。

◆【東京しまじま物語】

小笠原諸島 父島・母島の巻

・生鮮食品を買うことができるのが週に一度のおがさわら丸が島に来る日だけという暮らしはなかなか不便かもしれないですが、そういった状況だからこそその独特な食文化が生まれ、現在まで続いているのかなと思いました。亀料理は機会があればぜひとも食べてみたいです。

◆「1年間の相談を振り返って」 (2024年度)

・相談は中間支援組織の最も基本的な機能・役割で、とすれば「来る相談に対応する」受け身の姿勢になりがちですが、市民活動のあり様の変

化にこちらからアプローチする、ポジティブで新しい相談業務のスタイルの確立が求められてきているように思います。

◆「せかいをみる 台湾の言語運動を通して考える日本の「ことば」」

・台湾で話される言語にこのような変遷があったことを初めて知りました。また、中国と台湾では、使用する文字が簡体字と繁体字で異なるということしか知らなかったため、話している言語も異なっていることは知りませんでした。世界的にも少数民族が話す言語が次々と消滅しつつある現在、政府が衰退している言語を盛り上げるための策を講じる台湾政府の対応は素晴らしいと思いました。

◆「いいものみい」つけた！ カラフルメジロツクスの雑貨たち

・デザイン性が高く、写真を見ているだけで楽しい気持ちになりました。目白だけでなく色々な場所で販売して欲しいです。カラフルな色味や多様なデザインが作り手の皆さんの個性を表しているようで、とても魅力的だと思いました。

お気軽にご意見・ご感想を
お寄せください。



本誌で使用しているQRコードは、(株)デンソーウェブの登録商標です。

東京ボランティア・市民活動センター

(TVAC: Tokyo Voluntary Action Center)

<https://www.tvac.or.jp>

東京ボランティア・市民活動センターは、ボランティア活動をはじめとするさまざまな市民の活動を推進・支援しています。どうぞご利用ください。

利用

会議室	会議室A・B(各40人)・C(15人) 無料 ※会議室AB通し(80人)
貸出機材 申込み	印刷機(1台)紙持ち込み、点字プリンター 他 4ヶ月前から電話で受付(03-3235-1171)

情報提供

最新のボランティア・市民活動情報は、センターのホームページでご覧いただけます。 <http://www.tvac.or.jp/>

開所時間

火曜日～土曜日：9時～21時／日曜日：9時～17時
(月・祝祭日・年末年始除く)

交通アクセス

JR、地下鉄(東西線・有楽町線・南北線・大江戸線
出口B2b)飯田橋駅下車

ネットワーク

発行人 山崎美貴子

編集委員 江尻京子(東京・多摩リサイクル市民連邦)

片岡紀子(患者スピーカーバンク)

小池良実(岡さんのいえTOMO)

小淵康博(西武信用金庫)

小林涼帆(明治大学)

野村美奈(武蔵野会 リアン文京)

山田恵莉香(社会福祉法人 杉並区社会福祉協議会
杉並ボランティアセンター)

TVACの公式ソーシャルメディア



【本誌396号に関するお詫びと訂正】

2025年6月に発行いたしました『ネットワーク』396号の5頁見出しにおきまして、下記の誤りがございましたので訂正いたします。

本件の誤掲載により、関係各位にご迷惑をお掛けしたことを深くお詫び申し上げます。

【訂正内容】

(誤) 東多摩再資源事業協同組合

(正) 東多摩再資源化事業協同組合

編集・発行：東京ボランティア・市民活動センター
〒162-0823 東京都新宿区神楽河岸1-1
セントラルプラザ10階
TEL：03-3235-1171 FAX：03-3235-0050
E-mail：nw@tvac.or.jp

印刷：島津印刷(株)
デザイン：東京ボランティア・市民活動センター／島津印刷(株)
表紙イラスト：フローラル信子

2025年8月20日発行(通巻No.397)
ISBN 978-4-909393-64-7 C2036
定価400円(本体364円＋税10%)
本誌掲載記事の無断複製・転載を禁じます。

いいもの みい~つけた!

このコーナーでは、ボランティア・市民活動・福祉施設のグッズや作品を紹介します。

Vol.
55

おいさがぎゅっとつまった こだわりの手作りジャム

わたしたちは、精神に障がいをお持ちの方と共に手作りジャムを作っています。季節ごとに各地域で採れた国産果物の一つひとつ丁寧に下ごしらえし、果物とてんさい糖のみを使用した手作りジャムが自慢です。

ジャムでは一般的ないちごのほか、梅や柿、キウイやプラムなど多数取り揃えています。さらに、地域の方々からの寄付による夏みかんマーマレードをメインとしつつ、最近では種類も豊富になってきています。素材の味そのままに、甘すぎず大人の味が楽しめます♪無添加なので、一度開封したら冷蔵保存で10日を目途にお召し上がりくださいとお伝えしていますが、リピーターさんからは「10日も持たない。2〜3日で無くなっちゃう(笑)」との声が多く聞かれます。

近隣には旧古河庭園や飛鳥山公園といった北区の名所もあります。近くにお越しの際には是非お立ち寄りいただき、当店のジャムを楽しんでください。お待ちしております！

色とりどりのジャム。一律500円(税込)(※一部除く)で販売しています。贈答用の包装も可能です。



利用者みなさんと一緒に採った、北区産の夏みかんマーマレード(甘さ控えめ!)

つばさ工房

特定非営利活動法人

北区精神障害者を守る家族会 飛鳥会

住 所 〒114-0024 東京都北区西ヶ原2-40-12
パーソナルハイツ飛鳥山1F

お問合せ TEL/FAX 03-3910-4617

営業時間 9:00 ~ 17:00 (平日のみ)



WEB



Instagram

写真提供：つばさ工房

作り手インタビュー



工程のひとつひとつに、様々な人が手をかけてできあがる、『いいもの』。制作にまつわるお話をうかがいました。

やさしい手作りジャムは、果物で地域とつながる

つばさ工房では、果物を手に入れるところから、精神に障がいをお持ちの方々がほぼ手作業でジャムを作っています。果物本来の味を大切に引き出したジャム作りについて、施設長の中村猛さん、職員の福田大輔さんにお話を伺いました。



西ヶ原駅から徒歩1分のつばさ工房
赤いテント屋根が目印

ージャムを作り始めたきっかけや経緯について教えてください。

移転する前の事業所のときに、2階から見えるお宅の庭木の果物が鳥に食べられてしまっているのを発見し、それを何か活かせないか考えたのがももとのきっかけです。近隣の方に庭になっている果物をお裾分けしていただけますかという内容のビラを配り、反響があったところからだんだんつながっていきました。そこからもう15年以上ジャムづくりを行っています。(中村さん)

ージャムの特徴やこだわりについて教えてください。

職員含めて5～6人ほどで1日35～40個ほど作っています。ジャムの種類は現在17種類くらい置いてあるのですが、1年トータルで見ると20種類以上です。



いちごの下ごしらえの様子。一つひとつ機械を使わず丁寧に手作業しています。

こだわりは、身体にやさしい素材を使っていることです。また、あまり機械に頼らざるべく手作りしています。利用者の方が異物の混入や温度管理の徹底、糖度は30%～40%になるようになど、みなさんそれぞれが役割を発揮し、細かく見ていただけています。果物によって1日で作り上げるものもあれば、下ごしらえしてから何日もかけて作るものなど、加工方法を工夫しています。特に人気のジャムは、近所の七社神社に利用者の方と実際に収穫へ行った北区産夏みかんです。パンに塗るだけではなく、味噌と和えてきゅうりと一緒に食べたり、油と醤油を加えてドレッシングとしてもおいしく食べたりしていただけます。(福田さん)

ー地域の方々の反響はどうか？これからの展望も合わせてお聞かせください。

「甘すぎなくていいわ」など喜びの声をいただきます。

現在北区の担当者の方からのすすめでふるさと納税の返礼品に登録申請中なので、ふるさと納税によりジャムの売上が伸びて、工賃*をより多くお支払いできるようにしたいです。

今後は、利用者の方にとってのやりがいや、楽しみにつながるように、利用者と地域の方々がふれあう機会をもっと増やしていきたいです。(福田さん)

*工賃：生産活動(仕事)を行った利用者に対して支払うお金。



工房での直接販売のほか、様々なイベントにて販売会も行っています！

公益財団法人 大和証券財団

現在募集中

2025年度(第32回)ボランティア活動助成概要

応募課題	①高齢者、障がい児者、子どもへの支援活動及びその他、社会的意義の高いボランティア活動 ②地震・豪雨等による大規模自然災害の被災者支援活動
応募資格	5名以上で活動し、かつ営利を目的としない団体
応募金額	1団体につき上限30万円(予定総額5,100万円)
応募期間	2025年8月1日(金)～9月15日(月)
助成対象期間	2026年1月1日(木)から12月31日(木)

※大規模自然災害とは、「東日本大震災」「平成28年熊本地震」「平成29年7月九州北部豪雨」「大阪府北部地震」「平成30年7月豪雨」「北海道胆振東部地震」「令和元年台風15・19号10月25日からの大雨」「令和2年7月豪雨」「2024年(令和6年)能登半島地震」等

※助成要領及び申請時の手続き等の詳細は、当財団のホームページをご覧ください。

助成金贈呈式の様子



「兵庫県地区：採択団体への選考経過報告の様子」
場所：大和証券 神戸支店 ホール

「愛知県地区：採択団体への贈呈書授与後、各団体の皆さんと名古屋支店長との記念撮影」

場所：大和証券 名古屋支店 ホール



お問い合わせ

公益財団法人 大和証券財団・事務局へ

TEL：03-5555-4640 FAX：03-5202-2014

URL：<https://www.daiwa-grp.jp/dsz/>

ISBN 978-4-909393-64-7 C2036 ￥364E

2025年8月20日発行

2025年8月号

通巻397号

発行人

山崎美貴子

〒162-0823

東京都新宿区神楽河岸1-1

東京ボランティア・市民活動センター

定価400円(本体364円+税10%)

ボランティア・市民活動を広げ、応援する！

ネットワーク